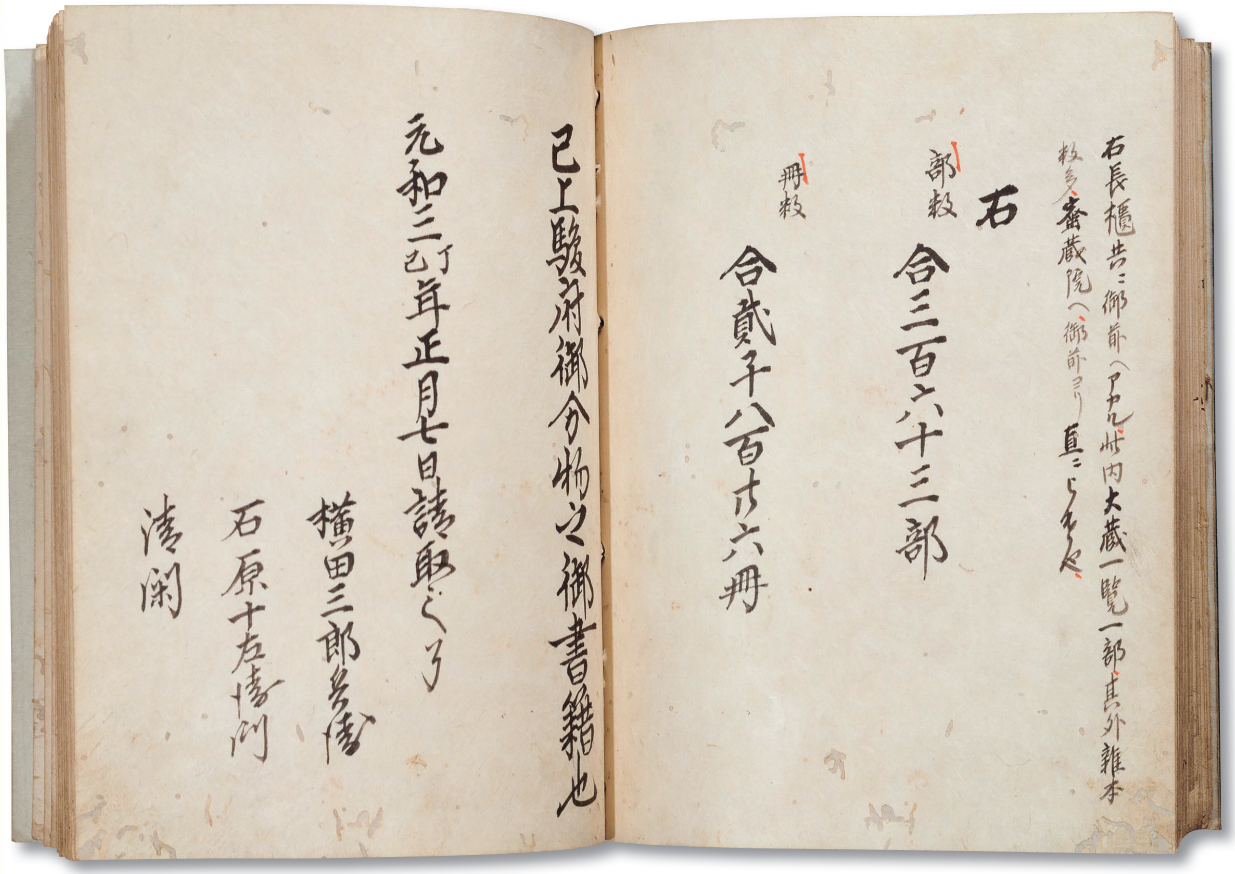
蓬左 HÔSA



御書籍目録（元和・寛永）

展示室1・2

尾張の茶道と香道

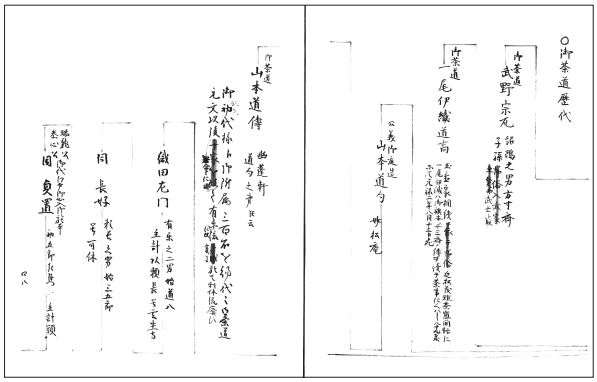
茶道や香道などの芸道は、尾張徳川家での御成や年中行事等の儀礼の場で重要な役割を果たし、また城下のにぎわいを演出してきました。この地に伝え遺された作品や史料からは、芸道を支えた人々の足跡をみることができます。

尾張徳川家では、十二代斉荘（一八一〇～四五）をはじめとする当主が茶の湯を愛好し、山本道伝や平尾数也ら代々の茶頭が茶の湯の諸事をとりしきりました。一方、城下では高田太郎庵（一六八三～一七六三）や河村曲全斎（一六七九～一七六一）などの茶人が千家流の茶の湯を広めました。近代になると、大名家や寺院の売立のなかで茶道具を蒐集した数寄者らによって、茶の湯の文化が引継がれました。本展覧会第一部「尾張の茶道」では、尾張の茶の湯を支えた人々ゆかりの作品を展観いたします。

また、幕末の動乱の中、京から名古屋へと移った志野流蜂谷家は、尾張徳川家の家臣や町人に多くの門人を抱え、尾張に香道を広めました。徳川美術館には蜂谷家の宗匠が鑑定し、仮銘をつけた香木が多数伝わっています。第二部の「尾張の香道」では、志野流十一世蜂谷勝次郎豊光が鑑定し尾張徳川家に献上した「蘭奢待」をはじめとする名香や、尾張徳川家伝来の香道具、蜂谷家所蔵の香道具を公開いたします。

鉄絵牡丹文槌形花生　武野紹鷗所用・山本道伝献上
朝鮮王朝時代　15世紀　徳川美術館蔵

本作品は内箱蓋表に「紹鷗ツチ花生　大黒庵」との朱漆銘があり、千利休の師であった武野紹鷗が所持していたとわかる。俵を横にした形の胴に口と高台がつけられており、「俵壺」と呼ばれる器形である。尾張徳川家の茶頭を代々勤めた山本家より尾張徳川家に献上された。



金城温古録　四十二　江戸時代　文久2年（1862）頃

『金城温古録』は、奥村得義が編纂した名古屋城に関する史料集成である。本冊巻末に収録される「御家御茶道頭畧系図」は、尾張徳川家に仕えた代々の茶頭とその流儀の大まかな系図で、一部に誤記も見られるものの、尾張徳川家の茶の湯の歴史を理解する上での基本となる史料である。

香木　銘 蘭奢待　源頼政・太田道灌・東福門院和子所用
徳川美術館蔵

蘭奢待は奈良・正倉院に伝わる名香で、天正2年（1574）信長が截り取ったことで名が知られている。附属する由緒書により、源三位頼政が所持し、江戸時代初めには東福門院和子に伝来し、のち志野流蜂谷家の手鑑香となり、宝暦4年（1754）に志野流十一世勝次郎豊光から尾張徳川家に献上されたとわかる。

展示室1

異国への窓 ―阿蘭陀・波斯・印度―

江戸時代、日本は中国・朝鮮・琉球やオランダ以外の国との交際を禁じる鎖国政策をとっていたため、諸外国からの情報や流通が制限された状態でした。ただしオランダや中国との貿易によって、直接国交の無い国々からさまざまな文物がもたらされました。大名はこれら海を越えてもたらされた舶来品を手にしては、見たことのない外国へのあこがれを募らせたことでしょう。

今回の展覧会では、大名家・尾張徳川家に伝えられたヨーロッパ・中央アジアなど諸外国の品々を中心に紹介します。

印花人物文阿蘭陀焼手付水指
ドイツ　17世紀　徳川美術館蔵

箱書に「阿蘭陀焼手附水指」とあるが、ドイツ・ラインラント地方の炻器と考えられている。ラインラントの炻器は不純物を多く含んだ粘土を用い1200～1300度の高温で焼成した吸水性の低い焼物で、17～19世紀に世界中に輸出された。

一番更紗　インド　17世紀　徳川美術館蔵

更紗はインドで作られた木綿の文様染め布で、なかでも「一番更紗」は最も上質の更紗とされた。本作品は江戸時代中期頃までに舶来した「古渡り更紗」で、日本では衣裳や茶道具などに使用され、細かく切り取られた跡がある。

展示室2

殿様が愛した鳥たち

人々にとって身近な生き物であった鳥は、古今東西を問わず宗教・文学・芸術などあらゆる分野において題材として取り上げられ親しまれてきました。人々は空を自由に飛び回ることができる鳥に強くあこがれ、神の使いや幸福を表象する瑞兆の動物として好んで作品に鳥の意匠を用いました。大名たちの間では、武運の神・八幡神の使いである鳩があしらわれた武具や、様々な草花とともに鳥を描く花鳥図が吉祥画として愛好されました。また、季節の移ろいを慈しんできた日本の人々は、春には鶯、夏には時鳥、秋には鶉というように、季節の訪れを告げる存在として鳥を歌に詠み、身近な道具に鳥の意匠をあしらうことによって日常生活の中で、季節を豊かに感じてきました。

本展覧会では、徳川将軍や尾張徳川家当主などが描いた花鳥図や鳥を象った陶磁器、さらに鳥がデザインされた大名道具を中心に展示し、鳥たちにどのような想いが込められ図様化されてきたのかを探ります。

鶏図　伝徳川家光（3代将軍）筆
江戸時代 17世紀　周東家寄贈　徳川美術館蔵

濃淡の墨で略画風に描かれた鶏は、三代将軍家光が余技で描いたと思わせる微笑ましい絵である。家光の子ども時代の絵は数点知られているが、どれも紙の隅に、ちまちまと描いてあるのが特徴であり、病弱だったという幼少時の性格をうかがわせる。

展示室1・2　徳川美術館

徳川美術館・蓬左文庫開館80周年　夏季特別展

没後四百年 徳川家康 ―天下人の遺産―

徳川美術館の収蔵品の骨格となる徳川家康（一五四二～一六一六）の遺産は、江戸時代を通じて尾張徳川家第一の宝物として大切に守り伝えられました。刀剣・武具・茶の湯道具・衣類・書籍など、多岐にわたる遺産は戦国武将の中でも群を抜く質と量を誇っています。また、家康が日常的に使用した道具や着用した衣服の他、国宝・重要文化財に指定された名品の数々は、天下人・家康の生きた時代を反映する希有な歴史的・美術的遺産でもあります。

本年は、家康が元和二年（一六一六）四月十七日に七十五歳で没してより数えて四百年の節目を迎えます。本展覧会は、この節目を記念し尾張徳川家に譲られ、今日まで伝来した家康の遺産「駿府御分物（すんぷおわけもの）」「駿河御譲本（するがおゆずりぼん）」の主要な品々を一堂に展示いたします。

蓬左文庫展示室においては、戦国武将・家康を天下人とならしめた軌跡を、徳川美術館・蓬左文庫が所蔵する戦国武将ゆかりの品々を通してご紹介いたします。

駿府御分物御道具帳　十一冊　江戸時代　元和2～4年（1616～18）
徳川美術館蔵

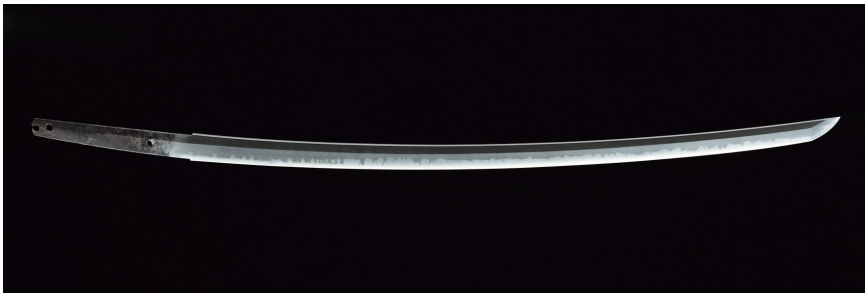
尾張家初代義直に分与された家康の遺産台帳である。元和2年（1616）に家康が駿府城で没した際、家康が所持した道具類は御三家に分与された。遺産内容は、金銀をはじめ、刀剣・武具・茶の湯道具・能道具・衣服・調度品や美術品、貴重な輸入品であった織物・香木や医薬品など多岐にわたっている。家康が、最高権力者として、いかに膨大な量の財宝・財産を所持していたかを知ることができる。

徳川家康三方ケ原戦役画像　江戸時代　17世紀
徳川美術館蔵

元亀3年（1572）武田信玄に大敗した三方ケ原合戦直後の家康の姿を写している。肖像画は本来威厳に満ちた姿で描かれるが、慢心の戒めとして憔悴しきった姿を描く画像は他に例が無く、家康の人間性を表す画像としても貴重である。尾張家九代宗睦の嫡子・治行の正室従姫が、婚礼の際に実家の紀伊家から持参した画像で、以来、尾張家では「御清御長持」という大切な品々を納めた長持に入れ、特別に保管していた。

国宝　太刀　銘 長光　名物　津田遠江長光　織田信長所持
鎌倉時代　13世紀　徳川美術館蔵

織田信長が所持した名刀の一つで、本能寺の変の後、安土城を接収した明智光秀に奪われ、重臣の津田遠江守重久に与えられたことから、この名が付けられた。光秀敗死によって津田は牢人となったが、後に加賀前田家に仕えてこの刀を前田家に献上し、その後、前田家から五代将軍綱吉に献上され、六代将軍家宣の時に、尾張家四代吉通に下賜されて、尾張家の所有となった。歴史的事件を物語る貴重な名刀である。



長篠合戦図屏風　　江戸時代　18世紀　徳川美術館蔵

天正3年（1575）5月21日に行われた長篠合戦を描いた屏風である。中央の連子川を挟んで左側に織田信長・徳川家康連合勢、右側に武田勝頼勢が配置され、画面右端には合戦の発端となった長篠城の攻防戦が描かれる。鉄砲が効果的に使用された合戦として著名で、もうもうとたなびく黒煙の描写が、合戦の臨場感を演出している。

「国登録有形文化財」登録記念報告

徳川園の建築文化財（1）

はじめに

徳川園と徳川美術館一帯は、十七世紀の二代藩主徳川光友の隠居所が置かれてから三百年以上、徳川義禮が大曽根邸として尾張徳川家の本宅を完成させてから百十五年、十九代義親が名古屋市に移管し、徳川園として市民に開放され八三年を経過している。施設のほとんどが戦災（一九四五）で焼失したが、わずかな建築が焼け残り園内は近世と近代の面影を伝えて、その存在は名古屋市の発展過程の一時期を表象している。

現存する建築は、すべて五十年以上経過し管理者が常駐して、名古屋市と徳川黎明会により保存管理されている。

さらに平成十六年（二〇〇四）日本庭園が整備され、蓬左文庫旧書庫・蘇山荘も新たに修復されて保存環境と展示効果が整った。

平成二十六年十月七日、建築および工作物九件が国の「登録有形文化財」として登録された。建築はすでに文庫や各種の講習会場、管理事務所などに機能しているため、あらためて「文化財施設の活用」と「公開保存」が確認されたといえる。

園内の建物はどれも「近代和風建築」と呼ばれる様式で、「幕末・明治以降に伝統的建築を継承していくことに価値を見出していく姿勢」と、「西洋文化の良い面を積極的に取り入れつつ、新しい日本に相応しい和風意匠を構築しようとする立場の建築」が特徴となっている。

徳川園黒門　塀　釣瓶井戸　脇長屋

建物の創建及び沿革

連続する黒門－塀－釣瓶井戸－脇長屋は明治三十三年（一九〇〇）に完成した旧尾張徳川家大曽根邸の正門や外構付帯施設として整備された。

昭和七年（一九三二）からは名古屋市の都市公園「徳川園」の施設となり現在に至る。その威容は創建時の容姿を示し、徳川園の歴史を示す重要な景観要素となっている。

◎　黒門（くろもん）

建物の構造・形式

木造本瓦葺切妻造　三間一戸薬医門　総欅造

建物の特徴

黒門は、徳川園の西に開く規模の大きな黒塗りの旧尾張徳川家大曽根邸の正門で、木割も太く、せい（成・高）も高い強固な趣を持つ総欅造の三間一戸の薬医門となっている。

桁行六・七七m、梁間三・一八m、棟高六・六二mで幅と高さがほぼ同一の方形で、均衡の取れた安定感のある落ち着きを見せている。

屋根は切妻造の本瓦葺、真反りで美しく軒は二軒疎垂木、鬼板獅子口棟瓦積で破風の拝みを猪の目懸魚で飾る。なお、獅子口や降棟・隅巴・軒巴には三つ葉葵紋の瓦を、留蓋に亀を乗せている。

間口は三・六二mと大型で脇間一方に潜戸を付け、胴を阿迫羽目としている。門の両袖には白漆喰壁と鎧張下見の源氏塀を従え、その正面右横の吊板唐戸を通用門としていた。

本柱は矩形・控柱は方形、下部を腰貫と飛貫で固め、成が〇・六mほどの太い冠木に、男梁を両端と主柱位置及びその中間の五ヶ所に架ける。

妻側は男梁の両脇に大瓶束を立て、その上に虹梁を載せ大瓶束が棟木を受ける妻飾虹梁大瓶束式としている。なお、男梁上の前面に鏡、後面に根太天井を張っている。

装飾の面では極めて謙虚で、繰形や絵様は付けていない。わずかに虹梁には眉を欠き袖切が見られるが若葉はなく、寺院の総門とは異なる豪壮な大名屋敷の様相を見せている。

なお、建築文書や棟札は不詳だが、小屋裏の束に「大工棟梁林春吉　明治参二年　亥」の落書がある。また枘穴等の痕跡が多くあるので、一部転用材を使用したのであろう。

◎　塀（へい）

建物の構造・形式

木造下見板張桟瓦葺

建物の特徴

徳川園の外周塀は北門から西へと黒門を挟んで園内の西側、南北の道路に沿ってあるが、ほとんどが平成十六年の整備のおり、既存塀撤去の上新設されたもので構造体は鉄筋コンクリート造となっている。その内わずかに創建時の既存の塀が残され現存している。

園内西側の黒門を挟んだ塀は、長さ五一・三m、

高さ三・一六m。源氏塀籠子下見板張としている。黒門の左右両袖に付き、向かって右袖には通用門を付けている。左袖は蘇山荘の西入口まで延びている。平成十六年に漆喰の上塗りや杉板、押縁の補修があるものの礎石、桟瓦葺、裏面の御影石の控柱など構造や意匠はそのままである。一方、西北よりの塀は、傾斜地に階段上に三間幅で設置している。長さ三五・四m、高さ二・七五mで、強固な石段積みに建つ源氏塀羽目板張、桟瓦葺。

様式は異なり、胴縁の縦板羽目張りとしており、裏面（東壁面）の板壁を杉皮張りの割竹押さえとしている。明治三十三年以前と思われる。

◎　釣瓶井戸（つるべいど）

建物の構造・形式

木造切妻造杉皮葺

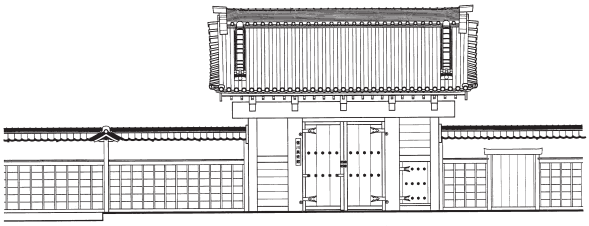
建物の特徴

門を入り振り返ると、黒門・塀・脇長屋が同一の視覚内にあり、徳川園の歴史を感じる重要な工作物となっている。

井戸は、脇長屋の北東面に位置している釣瓶式の井戸で、明治期の古写真によればその横に厩舎と馬の繋棒が見られる。井桁石枠は一・九五m角。屋形は、釣瓶高さ二・四〇m、その支柱や腕木はなぐり仕上げとなっており、滑車は鉄製桜花文透、屋根は破風板付きの切妻で杉皮葺。

平成十六年に支柱の基礎を補強し、腐食部を樹脂補修したが材を既存のままとし、屋根補修も下葺をアスファルトルーフィングとしたが材を再利用するなど、既存材と様式を厳守した修復仕上げとなっている。

徳川園　塀



徳川園黒門　立面図

◎　脇長屋（わきながや）

建物の構造・形式

木造平屋建桟瓦葺入母屋造

建物の特徴

元は門衛詰所で、今は徳川園管理事務所としている。桁行一九・六四m　梁間六・六二m　棟高六・〇二m、延面積一二七・三四㎡。入母屋造の平屋建桟瓦葺で、軒巴には六葉葵紋を見せる。

妻壁を狐格子（木連格子）とし、拝みを鰭のある猪の目とする。西立面は連続する塀に合わせ、腰を鎧下見板張、上部を白漆喰塗りとし、中央に換気窓を、左右に武者窓を付けている。黒門脇の北西角にも一段低い武者窓を付けているので、土間から出入りを監視していたのであろう。

内部意匠は、昭和七年（一九三二）に名古屋市に移管されたおり、詰め所・物置・公舎に分割、平成十六年に内部が改装され現状の間取りとなって、当時の様子は見られない。しかし、道路に面する西立面と北立面は、その屋根構えと共に創建時の旧状を保っており、大名屋敷の面影を残す重要な景観要素となっている。

用語解説

＊三間一戸薬医門　柱間が三つで出入口（戸）が一つの形式（三間一戸）で、棟の中心が前方よりに配置され、前の柱（鏡柱）を太くしている門構。

＊二軒疎垂木　垂木が上下二段構えで、垂木のあきが広いもの。

＊阿迫羽目　両側の柱に溝を刻んで板を挟み落とす仕上げ方法。

＊猪の目懸魚　屋根の切妻（拝み）部分に、猪の目（ハート形）または瓢箪形を垂下させた彫刻装飾。

＊冠木　左右の柱の上部を貫く横木。それに架かる垂直方向の梁を男梁、それを下から支える肘木を女梁。

＊妻飾虹梁大瓶束式　妻側の装飾は、わずかに反った虹梁（梁・水平材）に瓶子の様な形の短柱（大瓶束）を置いた架構。

＊眉欠き・袖切り・若葉　虹梁の部品名称で、下端に刳った平行線、これを彫るのを眉を欠くという。また両端部の斜めに厚さを薄く欠き取った部分を袖切りと言い、見附（正面　垂直部分）の唐草等の彫刻を若葉と呼んでいる。

＊源氏塀籠子下見板張　徳川園の形式では、腰壁は下見板張（重ね張り）としその上は白漆喰壁仕上げ、頂部に桟瓦屋根を葺いている。竪に打ち付ける押縁を、杉板が斜め（鎧張）になるように加工（籠子）した塀が基本となっている。

＊狐格子　竪横の格子の裏に板を張った壁で、蔀子と同じで竪子が前に出ている格子。

＊武者窓　大名屋敷の武家長屋などに用いられた竪格子の出窓。

（元名古屋市文化財調査委員会委員　畔柳武司）

表紙：御書籍目録（元和・寛永）（ごしょせきもくろく　げんな・かんえい）　2冊　27.0×21.2cm

御書籍目録（元和・寛永）

江戸時代（十七世紀）写

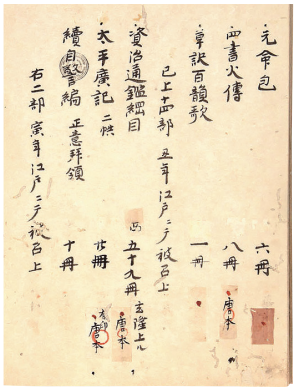
尾張家初代義直の蔵書目録である。表紙の写真は、この目録に収録された「駿河御譲本請取目録」の最後の部分である。元和三年（一六一七）正月七日付で義直の側近と見られる家臣三名による受取確認の署名がある。

目録の第一冊は、一筆で記されたものと推定され、巻頭から「駿河御譲本請取目録」の写が収録され、続いて寛永二年（一六二五）までと推定される収集書の目録が記載されている。第二冊は、その都度書き継がれたものと見られ、寛永三年（一六二六）以降の収集書の記録である。ただし最初の五丁分には、目録の間に「以上十部常御前」「肥田孫三郎ヨリ請取」「以上十部駿府雑本之長持ヨリ出ル」などの注記が入り、このなかには、家康生前に義直に譲られたと考えられている重要文化財「河内本源氏物語」とみられる『源氏物語』の記載もある。寛永三年以降の記述では、同十六年までは「以上廿五部寅年買本」など一年ごとに集計の記録があるが、最後の五丁分六十八件については、年代を確定できる記載がない。

基本記載は書名と冊数で、一番からはじまる通番ごとに十数件ずつ記載されている。通番は収納されている箱や長櫃（ながひつ）、担子（たくす）に付けられたもののようである。後筆で配架場所や購入・献上の別、出納の記録などが記されることがあり、受入簿兼出納簿の役割をはたしていたものと推定される。

また、書物を家臣などに与えた際に捺された消印には、義直であれば遺言状に捺された印と同じ印が使用され、義直没後は、遺品として蔵書を受け継いだ二代光友の所用印が捺されるなど「藩主の文庫」としての色合いが特に濃かった時期の特徴を物語っている。

元和二年（一六一六）、家康が亡くなると、刀剣および衣類調度、書物など所用の品々は「駿府御分物」として、将軍家と尾張・紀州・水戸の三家に分けられた。書物以外は、十数冊におよぶ「駿府御分物帳」の原本が現存しているが、のちに、「駿河御譲本」と呼ばれることになる「駿府御分物」の「御書籍」については、ここに収録された写が唯一の記録である。



御書籍目録（元和・寛永）
第二冊

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023　名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174
ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅前8番のりば名古屋駅発着で平日30～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行

【市バス】名古屋駅前2番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター3F　4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

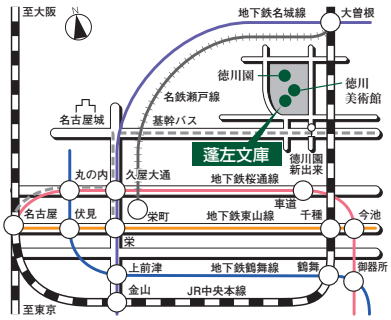
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分　桜通線「徳重」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分　120円）をご利用下さい。



ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）
12月14日(月)～1月4日(月)　※催事により変更することがあります。

■展示室／有料　一般：1200円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）
【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。
【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時
【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第90号　☆平成27年3月31日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）
※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。